①「28 年経っても涙が出ます…」　未解決「上智大生殺害事件」　被害者の親友が胸に抱き続けた思い

9/9(月) 6:11 配信

デイリー新潮 DAILY SHINCHO

大学生時代の小林順子さん

一報を知ったのはインドネシアのバリ島を旅行していた時だった。

「至急、日本に連絡をして欲しい」

【写真】サークル活動やカラオケを楽しむ順子さん

ホテルに戻り、実家や友人たちに電話を掛けまくった。まだ携帯電話がそれほど普及していない時代の話だ。すると友人の 1 人からこう告げられた。

「順子が事件に巻き込まれて亡くなった」

一緒にバカンスを楽しんでいた同級生たちに衝撃が走った。【水谷竹秀/ノンフィクション・ライター】

焼け焦げた家

1996 年 9 月 9 日、東京都葛飾区柴又で上智大学 4 年生だった小林順子さん（当時 21）が刺殺され、自宅が放火された事件発生から未解決のままきょうで 28 年。大学時代、順子さんの親友だった同級生のエリさん（仮名、49）は、あの当時の記憶を思い返すと、今でも自然に涙が出てくる。

悲報を受けた翌日、急遽、同級生たちをバリ島に残して日本へ帰国した。機内で日本の新聞を手に取ると、何度も通った順子さん宅のカラー写真が掲載されていた。だが、真っ黒に焼け焦げ、変わり果てていた。

「記事を読んで事件の詳しいことは頭では分かりましたが、バリ島という非日常の中にいたこともあり、なんの実感もわかなかった。信じられませんでした」

日本に到着し、母と一緒に捜査本部がある警視庁亀有署へ向かった。親友として事情聴取を受けた翌日、斎場で順子さんの亡骸と対面する。

その直後だった。

両脇を抱えられ、順子さんの母親がふらふらとした足取りで入ってきた。棺までたどり着

くと「ごめんね」と一言発し、その場で泣き崩れた。エリさんが声を震わせながら語る。
「その場面に居合わせてしまったんです。あれが一番きつかった。順子のお母さんには大学1年生の頃からお世話になっていました。もう1人の親友と一緒に順子の家に行ってご飯を食べさせてもらって。もつ鍋とか春巻きとか温かい家庭料理をたくさんご馳走になった。そのお母さんのあんな姿をもう見ていられなくて……」
28年経っても脳裏に焼きついて離れない光景――。

運命の仲良し3人組

順子さんと初めて会ったのは1992年の秋だった。上智大学外国語学部英語学科の指定校推薦枠で行われた面接会場でのことで、順子さんは隣の席に座っていた。
「緊張するね」
後に親友になるカナさん(仮名)も近くに座っていて、なぜかその2人だけは覚えていた。ところが推薦入試に落ちてしまい、その後、同じ学科の一般入試の日に、2 人に再会する。
「推薦に落ちてたんだ」
昼食をともにした順子さんの受験票に「葛飾区柴又」と書いてあったのがたまたま見えてしまい、「あの寅さん（映画『男はつらいよ』の主人公）の柴又だ！」と思ってさらに印象が強まった。エリさんは合格し、入学式に出席すると、そこでまた2人に再会した。3人全員が合格していた。運命を感じた仲良し3人組の学生生活が始まる。
「順子はとっても頑張り屋さんです。やりたいことに努力を惜しまない。帰国子女が多いクラスで授業も大変そうでしたけど、しょっちゅう図書館で勉強して着実に実力をつけていきましたね」
3人は、中学生に英語を教えるボランティアサークルに所属した。順子さんに誘われて入ったのだ。夏休みに行った新潟県の中学校では、合宿中のこんな思い出が懐かしい。
「順子も私も怖がりなんです。夜に1人でトイレに行けないので順子と一緒に行きました。トイレの中で独りぼっちを感じさせないよう、外で待っている方が歌うっていうルールがいつの間にかできたんです。順子はカラオケが大好きで、歌がうまかった。留学から帰ってきたらボイストレーニングを受けようと思っていると」
順子さんは 4 年生の秋から米国のシアトル大学に留学する予定だった。しかし、その出発の2日前に帰らぬ人となった。

「嘘だから安心してね」

告別式までの期間、エリさんは棺の周りに供える花の手配などを担当した。斎場で泣き崩れるカナさんの肩を抱き、「これは嘘だから安心してね」と真顔で言っていたと後に聞かされたが、全く覚えていない。
「私の言葉を聞いたカナは、『この子は大丈夫？』と思ったみたいで。当時はちょっとおかしくなっていたんだと思います。現実を受け入れられなかった。そもそもなんでこんなこと

になっているんだろうと」
　通夜では同級生たちに一言ずつメッセージを書いてもらうため、受付のところにそれ専用の紙も準備した。
「何か事件の手掛かりになることが書いてあるかどうかという視点で1枚、1枚、読みました。その後、棺の中に入れました」
　告別式には、あふれんばかりの人が参列した。終わると否応なく日常に引き戻された。学校に行っても順子さんはもういない。でも元々は留学でいなくなっていたのだと自分を納得させた。
　順子さんの自宅に保管されていた写真はほとんど焼けてしまったため、同級生から預かったものも含め、順子さんが写っている写真が入ったアルバム2冊ほどを遺族に届けた。
　警視庁の捜査員による事情聴取にはできる限り協力した。迎えの車で亀有署に何度も通い、知っていることは全て話した。当初は早期解決が期待され、「ホシが上がったら打ち上げ呼んであげるから」と温かい言葉を掛けてくれた。
　だが、打ち上げはいつまで経っても開かれなかった。

今年の法要でも再会

　事件発生の翌年から命日がある 9 月に法要が執り行われ、エリさんが参列者の取りまとめを行ってきた。法要では食事会が開かれ、皆、私服を着て、同窓会さながらの和やかな雰囲気だ。カナさんの発案で「順子基金」も設立され、犯人逮捕につながる有力情報の懸賞金に上乗せしてもらおうと、同級生たちから集まった「気持ち」を遺族に届け続けてきた。「私たちにも何かできることを」という思いからだ。エリさんがしみじみ語る。
「あれから28年、思い返せば早いですね。犯人は今も生きているのだろうか。30年近くも経てば、どんな人でも色々なことが起こり得ますから。もしこの世にいないのであれば、犯人のことを知っている周辺人物は通報してほしい。そうなっていない現状には憤りを感じます」
　順子さんの友人なら誰だって、犯人が逮捕され、司法の裁きを受けてほしいと切に願っている。しかし、28年未解決という厳しい現実が、エリさんに複雑な心境を抱かせていた。
　そして今年もまた法要の日、仲良し3人組は再会する。

水谷竹秀（みずたにたけひで）
ノンフィクション・ライター。1975 年生まれ。上智大学外国語学部卒。2011 年、『日本を捨てた男たち』で第9回開高健ノンフィクション賞を受賞。最新刊は『ルポ　国際ロマンス詐欺』（小学館新書）。10年超のフィリピン滞在歴をもとに「アジアと日本人」について、また事件を含めた現代の世相に関しても幅広く取材。2022年3月下旬から2ヵ月弱、ウクライナに滞在していた。
デイリー新潮編集部
新潮社

②【独自】「男と目が合ったら傘で顔を隠した」上智大生・小林順子さん殺害から 28 年で“不審な男”の新情報「事件解決が先か我々の命が先か…」

9/9(月) 17:39 配信

FNNプライムオンライン

動画

【独自】「男と目が合ったら傘で顔を隠した」上智大生・小林順子さん殺害から 28 年で“不審な男”の新情報「事件解決が先か我々の命が先か…」（FNN プライムオンライン（フジテレビ系）） - Yahoo!ニュース

https://news.yahoo.co.jp/articles/a2c3b285b2431aff4cfc932f624f5d743a4eeb0c

事件から 28 年の年月が過ぎた今も、犯人逮捕の知らせを伝えることはできませんでした。
28 年前の 9 月 9 日、東京・葛飾区で事件は起きました。
上智大学に通う小林順子さん（当時 21）が殺害され、自宅が放火されたのです。
小林順子さんの父親・小林賢二さんは「事件解決が先か、我々の命が先か、そういうギリギリの状況にいるのが最近の実感です」と話します。
火災が発生する 1 時間 10 分前に、現場近くには黄土色のコートを着て傘を持つ不審な男が目撃されていました。
この男は何者なのか。
FNN の取材で、男のある行動が判明しました。
当時、20 代の女性は雨の中、事件現場から 77 メートル離れた場所を自転車で走行。2 つ先の角にいる不審な男の存在に気付いたといいます。
自転車で走行する数十秒間、男はその場を離れなかったといいます。
女性は男の姿を感じながらも、そのまま自転車で走行。
そして、22 メートル離れた辺りで振り返ると、不審な男と目が合ったといいます。
目が合った瞬間、男は持っていた傘を下げ、顔を隠すようなそぶりを見せたといいます。
男を目撃した女性は「自転車で追い抜きざまに男の顔を見て、男と目が合ったが、すぐに男が顔を隠すように傘を下げた」と話しています。
男の行動について順子さんの父・小林賢二さんは「思わず隠したということは、やましいことがあるからでしょうね。かなり犯人の可能性が高いんじゃないですか。どんな些細なことでも結構なので、警察署の方にご一報いただければありがたいなと」と話しました。
自宅跡地に立てられた地蔵は、きょうも事件の行方を見守り続けています。
情報提供は「警視庁亀有署（03-3607-0110）」まで。
フジテレビ,社会部